

未来ノート

-202Xの君へ-

柔道

ひふみ

阿部一二三



⑤世界選手権男子66kg級準決勝で、相手と組み合う阿部一二三=2017年8月⑦小学生の頃の阿部一二三(右)と、兄の勇朗さん、妹の詩=父の浩二さん提供

負けても強く育った心

柔道との出会い

父が考えた特訓

涙の挫折が糧に

一本を取る柔道

阿部一二三(20)が初めて柔道を意識したのは、6歳のときだった。何の大会の、どんな選手を見たのかは覚えていない。だが、自宅のテレビに映った柔道選手に「ビビッときた」。

父の浩二さん(48)の記憶は少し違う。「一二三が柔道をやるように、僕が促すような発言をしたんやと思う」。浩二さんには苦い経験がある。水泳に熱中し、

小学生で全国大会に出場した。だが、中学に入ると体の大きな子に次々と抜かれた。身長は161センチで止まり、高校の水泳部でも活躍はできなかった。

そんな経験から、息子には柔道やレスリングのような階級のあるスポーツをやらせたいと思っていたという。「一二三やったら世界一になれるでえ、って。テレビを見ながら、そう言っ

たと思います」

当時、保育所の年長クラスで一二三はとくに元気な子だった。「力がありあまっていて。みんなが静かに座っていても、じっとしていらなくて」と母の愛さん(45)。父の思惑通り、一二三は「柔道をやってみよう」と言い出した。

近所の柔道クラブ「兵庫少年こだま会」に入会。本格的に技の練習が始まる。と、一二三は体の大きな上級生が怖くなった。練習後に泣きじゃくる姿を見かね

た両親は、2歳上の兄の勇朗さんに「一二三の面倒を見てやってほしい」と頼み、一緒に道場に通わせた。

兄のおかげで泣かなくなった一二三だが、日々の稽古では同じ年の子にころんころん投げられた。3歳下の妹の詩が柔道を始める。と、周囲から「妹の方が素質がある」との声も出た。

それでも、両親が一二三から「やめたい」という言葉を聞いた記憶はない。「お兄ちゃんが入ってくれて心強かったし、柔道をやめたいとは思わなかった」と一二三。試合で負けると悔しくて会場を飛び出し、両親が追いかけることもあった。負けても、投げられなくても、その小さな体からは闘争心があふれ出ていた。

(波戸健一)

◆「未来ノート」スクラップブックは、全国のASA(朝日新聞販売所)でお配りしています。インターネットの特設ページではイベントやスクラップブックについて詳しく紹介しています。「未来ノート 朝日新聞」で検索してください。

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。